

編集後記

本誌は誌名を『札幌市文化資料室研究紀要』、副題には「公文書館への道」と掲げてみた。

その真意は、公文書館開設を早期に実現して副題部分を取り除き、『札幌市公文書館研究紀要』と改題した上で本誌からの通巻数を伸ばしていこうというものである。

もっとも、その編集体制といえは編集長・編集員各一名のミニ体制であり、当初は紀要のコンセプトすら容易に定まらなかつた。一方でラインアップだけは昨年秋頃にその大半が内定するという不思議な進行をたどる。というのも、副題から予想されるように、本市は市立公文書館の基本構想検討委員会を昨年秋季に立ち上げたばかりで、冒頭の講義録三本は同委員会の委員に予定された方々から委嘱前に、本市公文書館に寄せる期待と要望について連続講義をお願いした貴重な記録（アーカイブ）なのである。

聴講者が当室関係者と委員会立ち上げ部局にのみ限定されていたため、せつかくの自身の濃い講義を内部だけで埋もれさせるには惜しいと考え、講師自身に補筆していただき、晴れて本誌に掲載することとなった次第である。

竹内論文は国立公文書館の長期研修である専門職員養成課程を受講した産物であり、仲本講演録はその養成課程で仲本氏が竹内と同期だった縁から特に来札を請うて実現したものである。未だ公文書館開設の先が見えない段階で、地方公文書館の雄から日米最先端の話の直に伺うことができ、聴講者一同大変な刺激となつ

たに違いない。

先に触れた本誌のコンセプトとは、本市が公文書館開設に向けてどのような取り組みをしているかの現実的な跡付けであり、当然時系列にも配慮している。基本構想検討委員会のホームページ（会議開催後に適宜更新中）と併せてリアルタイムに（本誌は年一号なので、できれば賞味期限内に）その展開を追いかけていただければ幸いである。創刊号では各委員の持論も披瀝され、その後の審議経過、そして後に策定される基本構想案をおのおの照らし合わせていただくことで本構想策定過程の透明性が相当程度確保されるのではないかと考えている。

また、全国的趨勢に倣って本誌も文化資料室ホームページ（奥付URL参照）から、各論考の閲覧・出力が可能である。

公文書館が現実開設となれば、それに伴い本誌のコンセプトも多少は変質せざるを得ないであろう。それまでの間、当分広角レンズは絞り気味にして、奥深き難物である「公文書館」と真正面から取り組んでいきたいと思う。

(T・K)